

聖書:イザヤ書61章1～11節

説教:聖書のみことばが実現しました

はじめに

先ほど四本目のろうそくに火が灯され、今朝はクリスマス礼拝の恵みにともにあずかっております。そのクリスマスに、昭和の演歌の話をして恐縮なのですが、ある演歌歌手が、「何から何まで真つ暗闇よ、筋の通らぬことばかり」と歌っていました。どうしてこんなことを持ち出すかと言えば、紀元前七百年前に活躍した預言者イザヤが語ったこと通ずるところがあると思うからです。先週の復習になりますが、彼は「公正は退けられ、正義は遠く離れて立ち、真理が失われている」と語りました。演歌と聖書。普段はあまり関係がないと思っているのですが、世の中が闇であるということに関しては同じことを言っていておもしろいのです。ちなみにこの演歌は「日陰育ちのおいらには、お天道様が明るすぎる」、そんなことも歌っていました。わかりやすく言い直せば、罪人である自分は、明るいお天道様の道を歩くことができない。これも実に聖書的ではないでしょうか。救いが無いような闇の世でも、庶民の人たちはとにかく生きなければならなかった。そんなとき、人々はこの歌でも歌って自分を慰めようとしたのかも知れません。

そんな演歌とは違って、聖書にはもちろん救いがあります。ではその救いとはどのようなことなのか、これから見て参ります。

1 イザヤ

1) むなしいことばだったのか

先週見ました59章のことを簡単に振り返ります。真理が失われてしまったこの世をご覧になった神は、どこを捜してもとりなす者がいないことに驚かれます。それで、神ご自身が「義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり」、「シオンには、贖い主として来る」と語りました。

その贖い主は、イザヤが語ってからおよそ七百年経ったときにイスラエルに来られました。その間、人々はずっと「今日かあしたか」と待ち続けたでしょう。しかしひとり残らず、救い主を見ずに死んでいった。どう思いますか。日本には「いわしの頭も信心」ということばがあります。嘘か本当かはわからなくても、とにかく信じることは尊いことだ、そんな意味だそうです。いつ来るかどうかもわからない方を待ち続ける。それは、いわしの

頭と同じではないかと言われそうです。もちろん、そんなことはない。私たちはむなしいもの信じているはずはありません。

2) 本当に実現したのか

なぜそう言えるのか。判断するポイントは二つあります。

一つ目。申命記18章22節にこうあります。「預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼におびえることはない。」

もしも語ったことが起こらず、実現しなかったらそれは嘘、偽物であるので信じてはならない。非常にわかりやすい基準です。本物であるからには、イザヤの語ったことが実際に起きたはずで、それを確かめれば良い。

3) 救い主を見ずに死んだ人たちは?

むなしいもの信じているのかそうでないのか。判断する二つ目のポイント。イザヤの後、七百年間人々は待った。待ったけれど来なかった。その人たちはどうなるのか。やっぱりむなしいものを待っていたことになるのか。もしキリスト教が本物で信じるに値するものであるなら、救い主に会うことはなかった人たちも、救われなければならない。聖書がそのことについてちゃんと書いてあるのかどうか。それが二つ目のポイントになる。

2 イエス

1) イザヤ書を朗読する

まず一つ目のポイント、イザヤが語ったことは実現したかどうか。もちろん結論は実現したということになるのですが、問題はそれをどうやって確かめるかです。

それでまず1節の途中まで読みます。「神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者を癒やすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。」

ここに出て来る「わたし」とは、59章にあった「とりなす人」、「贖い主」のことです。この方が主によって霊が注がれて、主のみもとから遣わされる。では、それは誰のことか。ある有名な新興宗教の教祖は「私はイエス・キリストの生まれ変わ

りです」と言っているそうです。「私はイザヤが預言した救い主だ」と自称している。もちろん自分が言っただけでは、本当か嘘かはわかりません。確かめるためには別の方法が必要です。

2) 「聖書のみことばが実現しました」

そこでルカの福音書4章16節から21節を読みます。「それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所を目を留められた。「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られた。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていた。イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」」

イエスは、「今日、この聖書のことばが実現しました」と言われ、イザヤ書の「わたし」とは自分のことであると宣言しました。

3) 何が実現したのか

こんな場合二つの可能性がある。一つ目。ペテン師、嘘つきである。あの新興宗教の教祖だつて堂々と名乗るくらいですから、嘘か本当かわからない。ペテン師だと疑った方がよい。

二つ目の可能性。ほんとうに救い主である。でも、どうやって確認するか。これも簡単です。語ったとおりになったかどうかを見ればよい。語った本人が、本当に捕らわれ人に解放を告げ、虐げられている人を自由の身としたのか。イエスは、聖書のみことばが実現しましたと言っただけで、いったい何が実現したのでしょうか。

3 永遠の契約を結ぶ

1) 救いの衣を着せ

イザヤ書61章10節後半。「主が私に救いの衣を着せ、正義の外套をまとわせ、花婿のように栄冠をかぶらせ、花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」

59章17節に救い主がどのような姿で来られるかが書かれていたのと比べてください。「主は義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり、

復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。」

表現の仕方が驚くほどよく似ています。イエスがもし本当に私たちの救い主であるというのなら、ご自分の義と呼ばれるからだ、救いと呼ばれる頭、すなわち主のみからだが無傷であるはずがない。私たちが罪から買い戻される、贖われるために非常に高価なものが支払わなければならない。いったいどうやって支払ったか。主のみからだは十字架につけられる。そのような方法で支払われた。そのことが実際に二千年前、ゴルゴダの丘でなされた。みことばが実現したことがわかる。だから私たちは、この方が贖い主だと信じられるのです。

そうしますと、「私はイエス・キリストの生まれ変わりである」と言うからには、どんな覚悟が必要かこれでおわかりでしょう。十字架という最期を遂げる覚悟がなければならない。ですから、私は恐ろしくてとても自分がキリストですとは言えないわけです。

2) すべての嘆き悲しむ者のために

では二つ目のポイントに移ります。待っていたのに救い主を見ないで死んだ人たちはどうなるのか。2節。「主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。」見落としてしまいそうなことばですが、ここに「すべての」とあります。いったいどこまでの「すべて」なのでしょう。あの人は慰められるけれど、他のあの人たちは慰めを受けない。そんな区別があるのでしょうか。いいえ、ありません。主が「すべて」というのなら本当に「すべて」なのです。すべての嘆き悲しむ者と言うのなら、どのような時代であろうと国であろうと民族であろうと区別がない。イエスが来る前に死んだ人たちもそうです。もし闇の世にあつて罪に苦しみ嘆き悲しんでいたのなら、その人たちも含まれる。

これに対して反論があるでしょう。「死んだら終わりですよ。既に死んでしまった人たちが、後から来た救い主に救われるなどありえない。」でも聖書には何が書いてあるか。ヤイロの娘が死んだとき、イエスはなんと言ったか。「死んだのではない。眠っているのです。」そう語って、イエスが手を置いたとき、娘は生き返った。神にあつては、手遅れはない。死んだらおしまい、ではない。たとえ死んだとしても、まったく問題がない。神はすべての人を覚えておられるはずです。

3) 永遠の契約

それでもまだ信じられないでしょうか。では、8節後半。「わたしは真実をもって彼らのわざに報い、永遠の契約を彼らと結ぶ。」「永遠の契約」とあるところに目を留めます。「永遠」というとずっと遠い未来の先のことで、過去のことは含まれていないように思うかもしれません。しかし救いの契約はいつから結ばれたのでしょうか。聖書に契約のことが最初に登場するのはノアの時代、創世記の最初の頃です。であれば、聖書の「永遠」は実質的に過去も未来も含めてすべての時代を指していると考えて間違いない。

だからたとえ救い主を見ることなく亡くなっても大丈夫。神はすでに私たちと永遠の契約を結んでくださっているのです、嘆き悲しむ者はすべて救われる。

そうは言っても、何年待っても救い主が現れなければ、信じるのは無駄ではないか、気の短い方々は特にそう思うかもしれません。けれどもユダヤ教の人たちは救い主はまだ来ていないと考え、今も待ち続けています。数々の迫害やホロコーストを経験してきた彼らですが、いまなお救い主を待ち望んでいます。その忍耐強さを見るとき、イエスを認めない頑なさはあるにしても、やはり彼らは選ばれた民であると思わされます。

聖書のことばがこの方を通して確かに実現した。なので、いま私たちは再び来られるイエスを安心して待ち望むことができます。そのことを覚えて、私たちはまたクリスマスをお祝いします。